

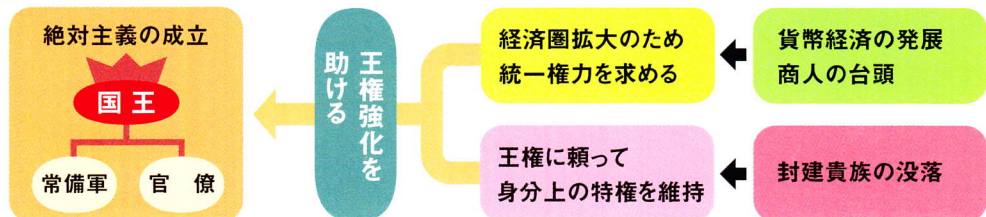
国王権力の強化で 生まれた絶対君主



封建社会の崩壊後、ヨーロッパに確立された政治秩序は絶対主義体制だった。

ヨーロッパの絶対主義体制			
1800年	1700年	1600年	1500年
※ []内は在位年。		フェリペ2世 [1556~98年] 広大な植民地を領有し、スペインの絶頂期を築く。	スペイン
	エリザベス1世 [1558~1603年] スペイン無敵艦隊を撃破。イギリスを強国に育てる。	ヘンリ8世 [1509~47年] 首長法を制定し、国内の教会を自分の支配下に置く。	イギリス
	ルイ14世(太陽王) [1643~1715年] フランス絶対王政の絶頂期を築く。「朕は国家なり」。		フランス
マリア=テレジア [1740~80年] ハプスブルク家を継ぎ、プロイセンと抗争した女帝。			オーストリア
フリードリヒ2世(大王) [1740~86年] 「国家第一の下僕」を自称した啓蒙専制君主の代表。			プロイセン(普魯シヤ)
エカチェリーナ2世 [1762~96年] 啓蒙専制君主の1人だが、晩年は反動化した。	ピョートル1世(大帝) [1682~1725年] 西欧化・近代化政策を推進する一方、農奴制を強化。	イヴァン4世(雷帝) [1533~84年] 大貴族を弾圧し、恐怖政治をしいたツァーリ(皇帝)。	ロシア

絶対主義の成立過程



諸侯の没落と大商人の支持で 力をつけた絶対君主

16~18世紀のヨーロッパでは、封建制の崩壊とともに王権が強大化した。王権の強大化は、強い国王によって国家が統一されたほうが商売上都合がよい都市の大商人からも支持された。こうして各国では、常備軍と官僚制を背景に国王が専制政治を行う絶対主義体制が確立していったのである。

フランスではルイ13世の時代になると、宰相リシュリューが大貴族を抑えて王権の強化に努め、ついでルイ14世の宰相マザランもさらなる中央集権化を推し進めた。マザランの死後、ルイ14世は、王権は神に授けられたものであるとする王権神授説を唱えて絶対主義を正当化し、財務長官にコルベールを登用して、国力強化のための重商主義政策を徹底させた。こうして、直属の常備軍や官僚制度に支えられたフランス絶対王政はその絶頂期を迎え、ルイ14世は「太陽王」とよばれた。

絶対主義体制を支えた 重商主義政策

貨幣の獲得を重視する重商主義政策は、金銀鉱山を開発して貨幣を蓄える重商主義と、輸出を増やして国内に貨幣を蓄える貿易差額主義の2つの政策からなる。ヨーロッパ各国はその遂行のため、鉱山獲得や輸出先拡大のための植民地獲得競争をくり広げた。重商主義政策によって保護された国内産業からは、マニユファクチュア(工場制手工業)を経営する産業資本家が誕生し、やがて王権と対立する市民階級も生まれた。